

周産期領域のソーシャルワークを大変と感じさせるもの ～静岡県内の周産期母子医療センターへのインタビュー調査を通して～

○前嶋真理子 江村宏子 佐藤理絵 遠藤卓馬 小澤純子

要旨

私は10年余り医療ソーシャルワーカー（以下、MSW）として医療機関に勤務し、そのうち4年ほど周産期の業務を担当している。日々、周産期のケースに向き合う中、クライエントである母子に利害が対立するニーズがある、院内外の連携先が他の領域と大きく異なる、クライエントから相談希望がなかなか出ない、介入の機会を作りにくく等周産期領域のみに存在する支援の難しさを感じるようになった。また、事例検討会や研修会も周産期に特化されたものは少なく、自己研鑽や情報共有の機会が限られているとも感じた。これらの実情を踏まえ、周産期領域を担当するMSWの実態について調査研究を行い、この大変さの根源や構造を解明し、対応策を模索することで負担軽減を図りたいと考えた。

1 目的

- (1) 総合病院における周産期領域を担当するMSWの実態、抱える困難感・大変さを明らかにする。
- (2) 明らかになった困難感・大変さを分析し、その構造と根源を考察する。
- (3) 明らかになった構造や根源を踏まえ、その負担を軽減する方法や対応を検討する。

2 方法

2024年12月に、静岡県内の2か所の周産期母子医療センター、4名のMSWを対象に約1時間のインタビュー調査を実施した。インタビュー結果から逐語録を作成し、周産期を特徴づける発言を抜き出し、考察を行った。

倫理的配慮：本研究はインタビュー対象者へ事前に研究の目的、方法、個人情報の厳守、オプトアウトについて説明し、書面にて同意を得ている。

3 結果

逐語録から60のキーワードが抽出された。考察の結果、その60のキーワードから「病気ではない妊娠・出産」「母親と胎児 2人のクライエント」という周産期を特徴づけるキーワードが浮上した。

4 考察

周産期領域では、病院という医療の提供が主な役割である機関で、病気やケガではないライフイベントとして捉えられる妊娠・出産を扱うことが多い。そのため、MSWがクライエント

に関わる時間は妊娠や出産前後に限られている。また、妊娠・出産の経過に問題が無ければ医師や助産師、看護師は診察や看護業務以外でクライエントに関わる機会が少なく、関わる必要性や理由も薄い。経済的問題、未受診、虐待等の問題はMSWに対応がゆだねられがちになり、MSWは主体的に問題解決を行う役割を期待されていると感じ、時間的な制約の中で大きなプレッシャーを感じ業務にあたっている構造が浮かび上がってきた。

また、周産期領域では妊娠を契機に医療機関の関わりが始まるため、常に胎児と母親という2人のクライエントが存在する。胎児は、母親が未受診となれば診察を受けることができず、養育者がいなければ命をつなぐこともできない、圧倒的にパワーレスで絶対的なニーズを有しているクライエントである。そして、意思表示ができない。この2人のクライエントのニーズの把握、アセスメント、支援計画の立案等の支援過程には、高い専門性や実践力、関係機関との密接な連携が求められる。この2つの要因は、周産期領域の支援を大変と感じさせる大きな要因であると考えられた。

5まとめ

2施設のインタビュー調査を通し、これまで漠然としていた周産期領域のソーシャルワークを大変と感じさせるものの根源を明らかにすことができた。今後は、この大変さを軽減するための方策についてさらに検討を進めたい。